
ハルケケと友達屋

笹丘かもめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルケケと友達屋

【Nコード】

N3606M

【作者名】

笹丘かもめ

【あらすじ】

「僕は友達屋さ。君が友達がほしいなら、僕が友達になろう」・・・
・友達屋はそう言いました。

ハルケケはもとも友達が少ないほうでしたが、さいきんになって一人もいなくなっていました。
というのも、だれひとりとしてハルケケと話をしていた楽しくなかったからです。

ハルケケは、じぶんがせかいでいちばんただしいと思っていました。実際、ハルケケの言うことがぜんぶまちがっているということはなかったのですが、卵のからをとがった方からわるか、尖っていないところからわるかとか、そういうどっちでもいいことも、ハルケケはじぶんのやることがいちばんただしいとおしつけるので、友達はだんだんハルケケのことがうつとうしくなったのでした。

ハルケケはじぶんがまちがっていると言われるのもとても嫌いでしたから、友達がいなくなったことにも、じぶんはなににも悪くないと、ひどくはらを立てていました。

ある日、ハルケケのところに、変なやつがやってきました。

「やあ、君がハルケケだね」

「君は誰だい」

「僕は友達屋さ。君が友達がほしいなら、僕が友達になろう」

友達屋はにこにこしながら続けました。

「どんな友達がおのぞみだい？」

君が好きなときにいつでも遊んでくれる友達かい？

君のことが大好きな友達かい？

君を認めてくれる友達かい？

君を尊敬してくれる友達かい？

君が正しいと盲信してくれる友達かい？

ぜんぶぜんぶ君の思い通りになる友達がいいかい？」

「ぜんぶだ、ぜんぶがいい」

ハルケケは、ちょうどこんな友達を望んでいたのです。

友達屋はにこにこわらいました。

「ハハハ、よくばりだねえ」

友達屋はポケットから紙とペンをとりだしました。

「さあさ、ここにちよいちよいと丸をつけて、ここに君の名前を書いたら、それでもう僕は君の友達さ」

ハルケケはサインをして、それで友達屋はハルケケの友達になりました。

それからハルケケと友達は、まいにちまいにち一緒に遊びました。

ハルケケのもとの友達が遊んでくれなかったような朝早くから夕方遅くまで、ずっと一緒に遊びました。

ゲームをすればいつもハルケケが勝ちましたし、かけっこでもいつもハルケケが勝ちました。

友達屋はハルケケの言うことは何でも聞きました。

ハルケケが誕生日プレゼントがほしいといった時も、にこにこしながら、おのぞみのプレゼントを持って現れるのです。

ハルケケが悪戯をしてお母さんに叱られた時も、友達屋は一生懸命、ハルケケはわるくないと励ましてくれるのです。

友達屋は、ハルケケに何も望んでいるそぶりはなかったのです、ハルケケは気をよくして友達にどんどん望み続けました。

友達屋はにこにこ笑っていました。

ある日、ハルケケは思いました。そして、友達にこうもちかけました。

「ねえ友達、僕のもとの友達も、僕ときみの友だちにしてやろうと思っただけど、どうだい」

友達は笑いました。

「だめだよ、だって君の友達は僕のお客様じゃないからね」

ハルケケはおどろいて言いました。

「君は僕の友達じゃないか、あんなに君」と一緒に遊んだのに」

「僕」で『散々好き勝手遊んでおいて何様のつもりだい？」

友達は、にいつと歯をむいて笑いました。

「そろそろ頃合いだと思っていた頃さ、お支払いをお願いしよう」

ハルケケはブルブル震えだしました。

「お支払って」

「はじめに言っただろう？ 僕は友達屋さ。

君のお望みどおりの友達を演じてやったんだ、もうちょっと感謝されてしかるべきだと思っただがねえ。

さて、ご勘定だ。

基本料、オーダーメイド友達設定『ぜんぶ』、休日出勤給、時間超過料金、お誕生日料金は1回分プレゼント料別途、お慰めが6回、鬼ごっこが53回、かくれんぼが33回、その他ゲーム157回」

ハルケケは真っ青になりました。

「ま、まってくれ、僕はそんなにお金を沢山もっていないよ」

友達屋は笑いました。

「心配要らないよ、だって、おだいはね」

ぱくり。

「君だからさ」

ハルケケをすっかり食べおえると、友達屋はハルケケのものと友達のところへ走っていきました。

友達屋はにつこりしていいました。

「ぼくも君たちの友達にしてくれないかな。むろん、おだいはいいよ」

ハルケケのものと友達は、変なことをいうね、と言って笑いました。友達屋は、そのとおりだね、と言って笑いました。

そして、みんなでなかよくあそびました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3606m/>

ハルケケと友達屋

2010年10月10日20時22分発行